

**「STUDIO EXERCISES by GOATBED and BELIEVERS」  
Day and night every Saturday**

**6.13.20.27 May 2017**

**live report**

2016年8月の世田谷パブリックシアター公演ではツインドラムに女性ヴォーカル、パフォーマーを入れ、2017年3月の銀座ヤマハホール公演ではツインドラムにピアノを加えた形で、それぞれの会場の特性を活かし、柔軟なアプローチでGOATBEDサウンドを鳴らしてきた。そんなGOATBEDが5月の毎週土曜日に昼夜2公演で開催したのは、G-ROKS下高井戸スタジオでのリハーサルスタジオライブ。その名も“STUDIO EXERCISES by GOATBED and BELIEVERS”。

鏡張りの壁の前にステージが設置されているため、前方の観客は歌い踊る石井秀仁の姿の奥に自分の姿を見るという、なんとも他で経験しがたいシチュエーションだ。最終日の5月27日公演では、プレイスペースがL字型に配置され、センターステージの上手下手それぞれにドラムセットが、下手ドラムセットの先に雄次が陣取るVJスペースがある。そのどれもがライブハウス以上に観客と近い。リハーサルスタジオというフラットで自由な場所を使って、初日の1公演目は全曲カバーソングで構成したり、2週目はサポートを入れないシンプルなステージでのGOATBEDだったり、毎回違うテーマと違うセットリストでフロアを楽しませてきた。

5月27日、最終日の昼公演では近年のGOATBEDの王道とも言えるラインナップを、北野愛子(Dr)を加えた構成で披露した。開演時刻を少し過ぎた頃、フロア後方から観客の間を通過してメンバーがステージに登場。一曲目「ONLY FINALLY THERE IS FREE END」で上昇した後、「Damned thing in the rain」ではらはらと降り落ちる情感は、途中から入る北野のドラムがビートを強め、より深みを増していく。「BELLA-DONNA」の後には、「1205」「HARD LIMINAL」「OPENING CEREMONY」とインスト曲3曲。ステージ後ろが鏡張りのため、普段あまり見えないリズムマシンの操る石井秀仁の手元を、思いがけず鏡越しに見ることができた。「今日は最後なんで、もう一回かっこいいと思ってるものを見せてあげたい。俺がかっこいいとか好きな物をみんなに見せてあげたい。そういうことですよ」と、下高井戸公演で二度目の北野を入れた編成について語り始める。観客が静かに聞き入っていると、「少しこう、扉は開いてるじゃないですか。2、3歩踏み込んでみて、それでもダメだったらもう1歩踏み込んでみる。そうやって生きてきました」と人生観に触れた。暗にGOATBEDにもそうやって踏み込んでみてください、ということだろうか。しかし、すでに踏み込んでここに来ている観客達は笑顔で拍手をおくっている。不思議な余韻を残しながら、「DEAD ZEPP」から後半戦がスタート。「SLIP ON THE PUMPS」ではサビでフロアが合唱するシーンも。北野のドラムが鼓動とシンクロしてより官能的に響いた「T-B-P-T」漂うようなヴォーカルが印象的な「TEMP」、そして「ROSE&GUN」でフロアのボルテージを再び上昇させると「あと2曲、元気なやつを」と、硬質なダンスチューン「BUNNY BLADE」「deSLASH」を披露し、昼公演を締め括った。

夜の部は最終公演とあって、GOATBEDと、サポートドラマーのおかもとなおこ、北野愛子、さらにスタッフ陣営の平田博信がベースを、かんじがギターを務める、まさにGOATBEDが全幅の信頼を寄せるBELIEVERSたちによる共演。「最後なんでね、まあふざけますよ。あなた達はもう同志だからね、大いに歌って踊って楽しもうぜって……そんな感じです。では、下高井戸が心をつにすスイッチを入れる準備をしてもらって……」と、登場するなり、ところどころGOATBEDらしからぬワードを挟んだMCをしたかと思うと、一曲目はCOMPLEXの「PRETTY DOLL」。スクリーンには東京ドーム公演のCOMPLEX、目の前には吉川晃司ばりのマイクスタンドさばきで歌い踊る石井秀仁と、布袋寅泰風のコーラスをしてみせるかんじ。この回は終始こんな様子なのかと思ったら「JOHNNY RIDE」「RODEOLOGY」と、GOATBED初期曲が続き、大歓声上がる。しかし、「RODEOLOGY」で軽快に進んでいた流れが止まった。PCが止まってしまったようで、もう一度頭から演奏し始めたが、また同じところで止まってしまう。早速、傾向と対策を練るメンバー。その間のMCを突然振られた平田さんがメンバー紹介を終えた頃、「白石さんが、最後の最後はこれだって。拝む」と、PCに向かって手を合わせるメンバー。そんな簡単な祈祷が効いたのか、三度目は無事に演奏を終えて拍手喝采。「白石さんの言うことは間違いありません」と言いながら、実はwi-fiが入っていたという事実を告白しつつ、「今までもってたものは全部出し尽くしました。たくさん曲も演奏したし、服もいっぱい着たので最後はTシャツになったっていう。毎日楽しくやれて、みなさんのおかげですよ」と、この下高井戸4days公演を振り返った。「AICATCH」ではツインドラムの華やかさが印象的だったし、「JUNKAN NO NEIRO」の歌に寄り添うようなベースラインが心地よかった。そしてCOMPLEX再び。スクリーンにはもちろん東京ドームの映像が映し出され、その中で「1990」を高らかに歌い上げたのはいいが、問題はその後である。東京ドームの映像は矢代恒彦氏のピアノによるアウトロを余韻たっぷりに楽しんでいる様子が映し出されているのだが、なんとGOATBEDもその余韻に便乗しようとしているのである。映像と同じように両手を左右に振り、まるで地続きのように東京ドームとの一体感をはかるチームGOATBED(お客さん含む)。頭上の高さでどこぞに拍手をおくるチームGOATBED。ステージはその勢いそのまま、MCの予定も飛ばして「SAYS SAYS SAYS」「NEUROMANCER」「YOUNG VANING」と続く。最後の公演、残り少ない時間を惜しむように、できるだけ観客に近いステージの端に出てパフォーマンスする石井。「楽しいだけのライブをしたかったです。スタッフ一同でバカ騒ぎするのを」と感慨深げに語った。

ラストを飾ったのは「VOGUE MAN」。スクリーンには、このメンバーでのリハーサルの様子が映し出されていた。そして、すぐさまアンコールに突入。メンバー紹介した後、「一言で言うとみんなもう最高です」と語ると、おかもとのカウントからラストソング「恋をとめないで」へ。最高潮の盛り上がりの中、“STUDIO EXERCISES”は幕を閉じた。

距離の近さから親密さが増したのか、これまでのステージよりも少しだけ、石井さんは自分の内面をさらしていたように思う。タイトルのBELIEVERS然り、メンバーとの“縁”を語ったMC然り、2部での開放感然り。喜びや悲しみを共有することで生まれてくる感情や愛情があって、それを何かの形で残したり確かめたりしたかったのかもしれない。この日依頼を受けて、GOATBEDに関するコメントをメンバーの皆さんから集めたが、それもこの日のMCにリンクしている。それらを振り返ると、全8公演、ここに集まった人達BELIEVERSと呼ぶほど、今大切に思っているんだろうなと思った。そんな個人的感想を、こっそりとここに置かしていただく。